

各地で話題の病害虫

セイヨウナシくもの巣病(新称)

学名: *Rhizoctonia solani* Kühn

平成元年7月、岡山県の一部のセイヨウナシ栽培地のパス・クラサン及びラ・フランス種に葉が褐変枯死する症状が発生した。岡山県農業試験場の調査の結果、*Rhizoctonia solani*による病害であることが判明した。

本病は、早い年には6月中旬に発生し、梅雨時期に増加する。その後の発生は10月頃まで続くことがある。ニホンナシでは発生が認められていない。



岡山県農業試験場 那須英夫氏提供

病徴は、葉に、初め1~3mmの褐色斑点あるいは葉縁部に不定形の褐色斑を生じ、これらの病斑は多湿なときにはしだいに葉全体に拡大し、褐変枯死する。被害を受けている組織上には多数の菌糸がまん延し、枝を枯死させることもあるが、果実は感染しない。また、被害部にはしばしば直径1~3mmで灰褐色の菌核が形成される。被害葉、枝は菌糸が絡まり合い、くもの巣状を呈する。このため、被害葉は落葉することは少なく、また、地面から30~150cmの高さのところによく見られる。

防除対策は、り病枝葉を除去することが大切である。

シュクコンカスミソウうどんこ病(仮称)

学名: *Oidium* sp.

英名: Powdery mildew of baby's breath

本病は、平成7年夏から福島、広島県のハウス栽培のシュクコンカスミソウで発生を確認した。その後、福岡、佐賀、熊本、大分、宮崎の各県で本病による被害が発生した。被害が確認された品種は“プリストルフェアリー”、“ゴラン”、“ニューフェイス”、“ブランシー”、“ビッグベン”である。

本病は、葉・茎・花梗にうどんこ病の症状が現



広島県農業技術センター 松浦昌平氏提供

れ、下位葉から上位葉へと進展し、ついには葉が枯れ上る。

本菌の特徴としては、分生子柄は通常3細胞で、長さは74~134μm、分生子は分生子柄の先端に単生し、大きさは約41×18μmで長楕円形をしており、無色・単細胞で内部には多数の顆粒状内容物及び液胞を有している。

防除方法としては、①ほ場内に本病のり病苗を持ち込まない②発病株の除去・焼却等、通常の花き類のうどんこ病に対する耕種的防除対策の実施が有効である。現在、本種に対する有効な防除薬剤(殺菌剤)の登録はないが、ポリオキシン水和剤、EBI剤等が効果的である。

カーネーションハモグリバエ(仮称)学名: *Liriomyza dianthicola* (Venturi)

平成8年9月、北海道空知支庁浦臼町のハウス栽培カーネーションに、ハモグリバエの一種による茎、葉への被害が発生した。北海道北見農業試験場等で調査したところ我が国では未記録のカーネーションハモグリバエ(仮称)と判明した。

本種は、ヨーロッパに分布しており、イタリアでは、4月～10月の間に7世代以上を繰り返す。温室内での発育期間は1世代21日～33日とされている。寄主植物はカーネーションのみが知られている。



北海道北見農業試験場 岩崎暁生氏提供

カーネーションへの被害は、幼虫が葉に潜り模様を描くが、茎に落ちる場合もある。加害が激しい場合、着花数が減少したり、花の光沢がなくなるなどの被害がでる。また、食害痕を残すことから商品価値が低下する。

本種の成虫は、翅の長さ1.5mm程度で、体色は頭部、胸部側面及び脚は黄色、胸部背面は黒色である。幼虫は2～3mm程の小さなウジで、体色は乳白色から淡い黄色である。成虫、幼虫ともに近縁のナスハモグリバエなどと似ており、肉眼での識別は容易でない。

防除対策は、苗を移植する際、葉にハモグリバエの被害が出ていないか注意する。我が国での防除薬剤については今後の検討課題である。

オオモンシロチョウ学名: *Pieris brassicae* (Linnaeus)

英名: Large white butterfly

平成8年7月30日の新聞に、オオモンシロチョウ *Pieris brassicae* が6月8日に北海道南西部で初めて採集され、その後も採集されていることが報道された。その後、植物防疫所をはじめ各県の病虫害防除関係者等による調査の結果、北海道の日本海側及び青森県の北部地域に発生が確認された。本種は我が国には未発生で、その侵入を警戒している有害動物の一種であるので、その生態や発生状況等を紹介する。

海外における分布 本種の本来の分布地は、ヨーロッパ、北アフリカ、西アジアからインド北部、中国南部にかけての地域であると推察されているが、飛翔力の強い成虫による移動・分散や人為的な持ち込みによって現在も分布を拡大しつつあるといわれている。イギリスやスカンジナビア半島諸国ではヨーロッパの大陸部から成虫が飛来してくることが古くから知られている。また、これまで未発生地域と見なされていたロシア極東地域及び南アフリカには1990年代に入ってから新たな発生が確認されている。

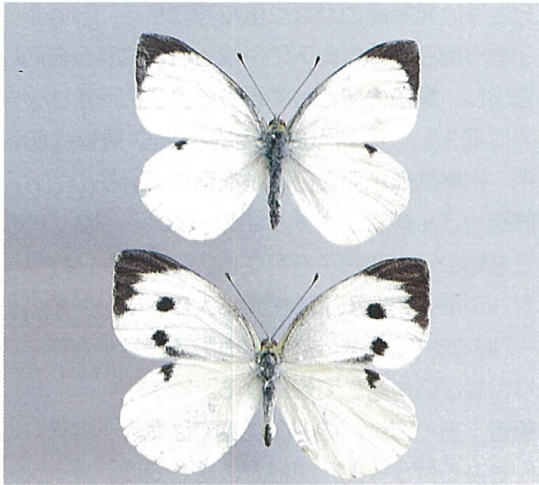
生態 海外の発生国では、本種は同属の近縁種であるモンシロチョウとともにアブラナ科作物の害虫として重要視されている。わが国においてもこれまでの調査の結果、発生地域では在来のモンシロチョウとともにキャベツを加害する幼虫が確認されている。本種はモンシロチョウと同様に蛹で越冬し、幼虫が主にアブラナ科植物を加害する点も同様である。他方、本種の成虫は木立の周辺などを好んで飛翔し、飼育条件下では数卵から100卵程度を卵塊として産下し、孵化した幼虫が集団で葉を摂食するために産卵された株は際立って激しい被害を呈する点等でモンシロチョウと異なる。また、幼虫の外観もいわゆるアオムシではなく、背中線と気門線の部分が帯状に黄色となり体背面には多数の黒点を有する独特な様相を示す。

発生状況 北海道や青森県におけるこれまでの調査では、キャベツ、ダイコン等のアブラナ科作物

への加害が報告されている。発生が確認された場所は何れも家庭菜園や農家の自家用菜園で、経済栽培されている圃場でのアブラナ科作物への加害事例の報告はこれまでのところない。その要因としては、経済栽培圃場では薬剤散布が実施されていることが考えられる。ヨーロッパでは、本種の防除には鱗翅目の幼虫を対象とした一般的な薬剤散布が行われている。また、アブラナ科の野生植物が国内各地に広く分布していることから、効率的な防除を行うために、野生植物での本種の発生

状況の把握も必要である。

我が国では本種を特定重要病害虫として厳重な検疫を行ってきた。国内における本種の発生状況等から、我が国における発生個体はロシア極東地域から飛来した成虫に由来するという説もあり、今後、どのような発生経過や分布の変遷をたどるか注視していく必要がある。また、個人的な趣味のために未発生地域に本種を人為的に持ち込むことは植物防疫上の観点からも当然慎まれるべきである。



成虫（上：雄、下：雌）

開張は6 cm前後で、モンシロチョウよりやや大きい。雄の前翅表面は翅頂部以外に黒色紋を欠く。



卵

卵の高さは1.1mm前後。1つの卵塊は数個から100個程度の卵よりなる。



蛹

体長は20～24mm前後。地色は象牙色から緑褐色まで変異があり、全体に黒点を有する。



幼虫

体長は40mm前後に達する。全体に多数の黒点を有し、背中線と気門線は帯状に黄色となる。